

## ハンブルク・聖カタリーナ教会の大オルガン

——出納帳にみる 17 世紀のオルガン巨大化の過程とその意味——

鈴木 千帆

17 世紀後半北ドイツでは、歴史上驚異的な楽器の発展を見る。プレトリウスに「神の楽器」といわしめられ、教会に君臨したパイプオルガンである。本稿はブクステフーデやバッハなどの傑作オルガン作品を生み出す源となったこの楽器の巨大化が、同地で 17 世紀後半に発生した爆発的原動力を探るため、6 つの原資料から成る H. Vogel 編《聖カタリーナ教会の出納帳》の記述を手掛かりに、ハンブルクと同教会大オルガンの改造過程を辿り、これを「オルガン巨大化」の一断面と捉え、考察を加えたものである。

同大オルガンは名器に到達するまで、実に 100 年近くの長い歳月がかかっていた。背後には他の教会に対する激しい競争意識があり、巨額の投資がなされ、無数の仕事を通して楽器が造られていた。また巨大パイプを鳴らすことに「権威」を託していたことも明らかになった。

そして当時ハンブルクでは、良質の建材の入手を可能にする貿易が活性し、建造技術継承による建造家の一都市集中、それに起因する激しい競争による技術の高度化が起こっていた。そこに巨大楽器や地位を求める優秀なオルガニストが集中し、いわば楽器と演奏家の良質の「循環作用」が同地に発生したのである。そして大オルガンは歴史建築である教会の高みに配置され、その空間をかつてない音量で満たし、神の声の代弁する楽器としてその音楽を轟かせたのだ。

20 世紀のテクノロジーの発展を背景に、世紀後半には音楽学研究の結実とも呼べる多くの巨大復元「歴史オルガン」が造られたが、産業革命前に完成の域に達し全盛を極めたオルガンの「意味」は、現代復元オルガンの持つ「意味」と遥かに異なっているのである。

「歴史オルガン」は、こうした改造過程で背負った複数の要因から「重層的」意味を内包している。製作の労や高度な技術の集積、「聖」なる教会にあることで相俟って備えた「権威 *Autoritaet*」を彷彿とさせているのである。